

建文帝の諡号について (3)

Evaluating Ming Emperor Jianwen
from the Perspective of his Posthumous Title (3)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

⑦萬曆年間

神宗萬曆帝は、即位直後につぎのような詔を出している。

[隆慶六年七月]^① 辛亥の詔に曰く、…一、革除の間の罪を被るの諸臣は、事うる所に忠なり、甘じて刑戮を蹈み、「死有りて二無からん」(『左傳』僖公十五年)。皆な我が太祖高皇帝の儲養(育て上げる)する所の忠臣義士なり。我が成祖文皇帝(永樂帝)は、當時に亦た「練子寧 若し在れば、朕は猶お當の之を用うべし」^①の語有り、是れ諸臣の罪は赦さずと雖も、心は實に朕(神宗萬曆帝) 今は我が聖祖の遺意を仰ぎ遵い、忠魂を褒表し、臣節を激勵せんとするを原ぬ可し。詔書 到るの日、各地方の有司官は、諸臣の生長せる郷邑を査し、或いは特に祠を建てるを為す、或いは即ち本處の名賢忠節祠に附し、歲時には禮を以て其の墳墓を祭るを致し、苗裔^も儻し存する者有れば厚く卹録(亡くなった人の功績を再評価する)を加えよ(『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三・「隆慶六年七月辛亥」条)。

① 穆宗隆慶帝は、隆慶六年五月に亡くなっている。

② 陳建の『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』(卷之七・「癸巳永樂十一年正月」条)に引くところでは、「練子寧をして今日の此に在らしめば、朕 固より當に之を用うべし」となっている。「①永樂年間」参照。

建文帝の諸臣を再評価し、その出身地で祠を建てるか、名賢忠節祠に合祀し、

歳ごとに墳墓を祭り、子孫の存在するものがあれば、援助せよ、と命ずるのである。

なお、『明史』では、「六月甲子」条に掛けている。

[隆慶] 六年五月、穆宗(隆慶帝) 崩ず。六月乙卯朔、日 之を食すること有り。甲子、皇帝の位に即く。明年を以て萬曆元年と爲し、詔もて天下に赦す。建文朝の節を盡せる諸臣を郷に祀り、苗裔有る者は卹録(亡くなった人の功績を再評価する)す(『明史』卷二十・本紀第二十・神宗一)。

神宗萬曆帝は、この時には十歳であった。

その二年後の萬曆二年(一五七四)十月十七日には、進講終了後、建文帝の事に話が及び、建文帝は出逃したと聞くがほんとうなのかと、神宗萬曆がたずねた。すると、張居正が、国史には掲載されていないが、先朝の古老から、建文帝は無事に逃げ出し、正統年間になって詩を書いたために、老僧となっていたところを見つけ出された、と伝え聞いていると答えた。神宗萬曆帝は、建文帝が書いたとする詩に深く感じ入っていたので、張居正がそれをたしなめた。

[萬曆二年十月]戊午(十七日)、上(神宗萬曆帝) 文華殿に御す。講讀あり。上(神宗萬曆帝) 従容として輔臣と語りて建文^マ皇帝^マの事に及ぶ。因りて問うて曰く、「聞く建文 當時逃免すと、果して否なるや」、と。輔臣の張居正 ^{こた}對えて言う、國史 此の事を載せず。但だ先朝の故老 相い傳えて言う、建文 靖難の師 入城するに當り、即ち髪を削り緇(僧服)を披り、問道従り走り出づ。後、四方を雲遊し、人 知る者無し。正統の間に至り、忽ち雲南の郵の壁上に于いて詩一首を題するに「江湖に流落すること數十秋(流落江湖數十秋)」の句有り。一御史の其の異有るを覺える有り。召して之を問うに、老僧 地に坐して跪かずして曰う、吾 故國に歸骨(骨を埋める)せんと欲す、と。乃ち驗して建文為るを知るなり。御史 以て聞し。遂に驛召もて京に來らし、宮に入り之を驗するに良に是れなり。是の時年已に七八十なり。後、其の終わる所を知る莫し」と。上(神宗萬曆帝) 因りて[張]居正に其の詩の全章を誦するを命ず。慨然として興嘆し、

又た書寫して進覽するを命ず。[張]居正 退きて其の詩を録して以て進む。因りて此の亡國の事・失位の辭を奏す。但だ戒めと為す可きのみ。[しかし]觀るに足らざるなり。臣 謹みて聖祖皇陵碑及び御製文集を録し、進覽して以て創業の艱難・聖謨の弘遠を見る。伏して皇上の覽て而して仰ぎ法とするを望む…（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之三十・「萬曆二年十月戊午」条）。

このように、宮中にいる神宗萬曆帝にも、建文帝の出逃説は伝わり、興味を抱いていたのである。

さて、萬曆十二年二月二十二日には、屠叔方⁽¹⁾（字は宗直，号は瞻山。浙江秀水の人。萬曆五年丁丑科（一五七七）三甲一百十八名の進士）が、革除された諸臣の外親（母方の親戚）の子孫をも解放すべきだと提案する。そして、神宗萬曆帝は、罪せられた建文の諸臣のうち、齊泰・黃子澄を除く他の者は放免したという。

〔萬曆十二年二月己巳（二十二日）〕廣東道御史の屠叔方 忠臣の外親を宥釋せんことを請う。略に曰く、竊かに恩詔の内開を見るに、「一、革除の間の罪を被るの諸臣は、事うる所に忠なり、甘じて刑戮を蹈み、「死有りて二無からん」（『左傳』僖公十五年）。皆な我が太祖高皇帝の儲養（育て上げる）する所の忠臣義士なり。成祖文皇帝（永樂帝）は當時に亦た「練子寧 若し在れば、朕は猶お當の之を用うべし」の語有り。今、聖祖の遺意を仰ぎ遵い、忠魂を褒表し、祠を建て、其の墳墓を祭るを致し、苗裔厚く卹録を加う。姻黨の猶お覆盆（冤罪）に蔽われし江西の忠臣の胡閏（字

(1) 屠叔方は、建文帝についての記録を集めた『建文朝野彙編』を著わしている。この『建文朝野彙編』は、『四庫全書總目提要』によると、存目に分類され、つぎのように評価される。

明・屠叔方撰。叔方は、秀水の人。萬曆丁丑（一五七七）の進士。官は監察御史に至る。其の書は、遼國編年・報國列傳・建文傳紀・建文定論の諸目に分かつ。蓋し野史の傳聞の説を雜採し、哀合し編を成す。大抵は謠傳を沿襲し、信史と爲らず。典故輯遺の謬説を摭りて、宣宗（宣德帝）を惠帝（建文帝）の子と爲すと謂うに至りては、尤も忌憚無し（『四庫全書總目提要』卷五十四・史部十・雜史類存目三・「建文朝野彙編」条）。

は松友、江西鄱陽の人)の一族の如きは、赤(誅滅)し、内親 盡く。[そこで]猶お外甥を抄解して分戌す。此の若き者は一にして足らず。乞う勅もて査し前項の姻戚の戌に在る者有れば、并せて郷に還るを宥さんことを。部覆ありて、^{かえ}回るを願う者は放ち回し、回るを願わざる者は免帖を給與せん、と。上(神宗萬曆帝)曰く、革除され罪を被る諸臣は、齊泰・黃子澄を除くの外、其れ方孝孺等の罪累に連及する者は俱に査勘して豁免せしめよ、と(『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百四十六・「萬曆十二年二月己巳」条)。

なお、『國榷』では、つぎのように記されている。

[萬曆十二年二月]己巳(二十二日)、廣東道御史の屠叔方 言えらく、革除され難に殉ずるの諸臣は、實に我が太祖の培養する所なり。皇上の恤録を蒙るや久し。但だ忠魂を褒表するや、尙お未だ盡さざるに屬す。其の交游・姻黨は、今に至るも遠戌(辺境の守りにつく)さる。九重の恩 一日未だ^{うづ}推らざれば、則ち諸臣の目は一日も未だ瞑せざるを恐るなり。果たして臣の言 謬ならず。乞う該部 省・直に通行し、有司・軍衛をして外親の戌に在る者を備査(調査)し、並びに郷に還るを宥し、留まるを願う者は之を^{ゆる}聴せ。如し絶戸ならば、其の籍を除き、永しえに里長に累するを得ざらしむ、と。上 之に従い、齊泰・黃子澄を除くの外、其れ方孝孺等の株累する所は覈免す(『國榷』卷七十二・「神宗萬曆十二年二月己巳」条・四四六八頁)。

その四年後の萬曆十六年(一五八八)二月丁丑(二十四日)に、國子監司業の王祖嫡(字は胤昌、号は師竹・四部堂・師竹堂・師竹山房。河南信陽衛(山東德州)の人。嘉靖十年(一五三一)～萬曆十九年(一五九一)? : 六十歳で没。隆慶五年辛未科(一五七一)三甲二百十名の進士)は、

缺典を修め、以て繼述(繼承)^{とうと}を隆ばんと奏し、建文の革除は未だ復せず・景泰の附録は未だ正さざるなりと謂う(『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百九十五・「萬曆十六年二月丁丑」条)。

と上奏した。⁽²⁾ 建文帝の年号の復活と、単独で景泰帝の「實錄」を作成することを求めたのである。

そのなかで、王祖嫡は、「臣愚 竊かに謂えらく、建文の紀年の混ぼす可からざる者は五つあり」として建文帝の年号を抹殺した問題点を五つ提出する。

古より大いなる無道の君 天人の共に棄て、其の命を革むを聞くも、未だ其の年を革めるを聞かざるなり。豈に惟だ用って殷鑒(前例を戒めとする)を存し、亦た實を以て爾^{しか}すること罔くす可からざらんや。[ましてや] 師を「靖難(難を靖んず)」と曰い、復讐に非ずを明らかにす。[なのに] 胡為れぞ海の内外に^{いた}薄るまで、已に奉ずるの正朔を追い、之をして死灰逝水の如くせしめんや。此れ不可なるの一なり(天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・七葉・「論革除附録疏」)。

①無道の君主の命を改めたことは昔から聞が、その年号を改めたことは聞い

(2) 陸可教(字は敬承、号は葵日。浙江蘭谿の人。萬曆五年丁丑科(一五七七)二甲二名の進士)の書いた王祖嫡の行狀(「明故右春坊庶子兼翰林院侍讀師竹王公行狀」：『陸學士先生遺稿』所収)によると、この内容の疏は張居正がいた時に一度提出されたようである。

復た革除の舊疏を以て勸むと爲す。革除の疏なる者は、建文君及び景皇帝の「實錄」の事を言う。公 初めて史館に入りし時、國朝の史事の關くるは、此れより大なるは無しと私念す。困りて具疏もて時に及びて釐正せんことを請う。而れども江陵公(張居正) 力めて之を尼(阻止)す。公 快意もて止む。然れども終に未だ嘗て一日も心を去らざるなり。是に於いて公 復た趣駕し以て北す。俄かに國士司業に遷り、遂に前疏を以て上つる。旨を得て景皇帝を重録する事は許さるも、建文君の事は、姑らく止め議すること母れとさる。蓋し終に事 成祖に關するを以てなり(萬曆三十七年〔一六〇九〕序『陸學士先生遺稿』卷十三・狀傳・五葉・「明故右春坊庶子兼翰林院侍讀師竹王公行狀」)。

なお、どのような関係のものか分からないが、王祖嫡は、陸可教の通籍の師であつた。陸可教の「王師竹先生像讚」と行狀とにいう。

此れ吾師の師竹先生の像なり…(萬曆三十七年〔一六〇九〕序『陸學士先生遺稿』卷八・箴講贊對・五葉・「王師竹先生像讚」)。

[陸] 可教 公(王祖嫡)の門に通籍すること十有七年なり。公(王祖嫡)に受知すること最も深し。[陸可教も] 自ら謂う公(王祖嫡)を知ること亦た最も深し、と(萬曆三十七年〔一六〇九〕序『陸學士先生遺稿』卷十三・狀傳・八葉・「明故右春坊庶子兼翰林院侍讀師竹王公行狀」)。

たことはない。ましてや自分の軍を「靖難（難を靖んず）」といい、復讐でないことを宣言しながら、地の果てまでにもわたって、「建文」の年号を抹殺した。

之を長老に聞くに、靖難に宣力（盡力）するの臣は茅土（高位高官）を覬覦（分不相応に望む）し、日夜建文の過を構（つくりあげる）す。〔この事はもとより〕成祖（永樂帝）の本心に非ず。事 甫めて平定し、固とより已に幡然と感悟す。是の故に李實（『實錄』同じ。『國権』は「呂震」に作る）の獨り封事の對無きを鄙しみ、吏部に舊惡を念わずの旨を論して、條例を榜文（告示）す。旋いで即ち除毀（棄去）されし文武の職官は、仍お見（現）秩に依れ、とす。斯の心なるや、堯舜の心なり。革除の議とは、惟れ〔洪武〕三十五年六月庚午、五府六部に命じて一應（一切）の建文の易うる所の政令・條格 悉く舊制に復し、今年もて〔洪武〕三十五年と稱せしむることなるのみ。説く者 亦た謂う、當時の臣の逢迎して此れを為すなり、と。後世 察せず。遂に成祖 獨り斷ずとし、人 敢て過を君父に歸すと言うもの莫し。親親の心をして鬱とし弗白（はっきりさせない）ならしむ。此れ其の不可なるの二なり（（天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・七葉・「論革除附錄疏」）。

②靖難の時に活躍した臣下の者は、爵位を得たいとして、建文帝の罪を作り上げた。これは永樂帝の本意ではない。永樂帝は、平定してから、そのことを悟った。また、「革除の議」というものは、建文帝の命じた法令を元に戻し、その年の年号を洪武三十五年とただけである。これは当時の臣下が永樂帝に迎合して行なったものである。後にはそのことが分からなくなり、永樂帝が行なったということになってしまった。

或いは謂う革除よりしての後、臣下も亦た屢しば以て言を為すも、卒に〔復活させることを〕行なう可からざる者は、我が成祖（永樂帝）の靖難（難を靖んず）・定鼎の功は再造の同じ、如し革除〔された建文の年号〕を復せば則ち師 名無きを疑う。成祖（永樂帝）の心の如きは何ぞや、と。是れ大いに然らず。天下は、太祖の天下なり。太祖の成祖・建文を視るに同

一の子孫なり。今日の太祖・成祖を視るに同一の祖宗なり。〔建文の年号を〕革除せざれば成祖の心を仰體する能わずと謂う。必ず革除すれば其れ太祖の心を仰體する為さんや。天下に跡の異なりて道の同じき者有り。武王紂を伐つに、〔伯〕夷・〔叔〕齊 馬を叩きて相い悖らず。「靖難（難を靖んず）」と書するは、成祖（永樂帝）の再造の功を彰らかにする所以なり。革除せざるは、建文の位に在るの實を紀す所以なり。亦た何の悖ることか之れ有らん。矧んや成祖（永樂帝）の謨烈（謀略と功業）は昭垂なり。豈に革除を以て顯にせんや、革除せざるもて晦くせんや。此れ其の不可なるの三なり（天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・七葉～八葉・「論革除附錄疏」）。

③あるいは、永樂帝の功績は、建国と同じである。もし建文の年号を復活させたならば、名が立たなくなってしまうという。だがこれは違うのである。太祖洪武帝からすると、永樂帝も建文帝も同じ子と孫である。いまからすると、太祖・成祖ともに同じ先祖である。「建文」の年号を抹殺しなければ、永樂帝の心を察せられないという。すると、抹殺すると建文帝に位を譲った太祖洪武帝の気持ちを察したというのだろうか。「難を靖ずる」とするのは、永樂帝の建国の功績をあきらかにすることであり、建文の年号を復活させるのは、建文帝が確かに在位したことを示すためである。矛盾することがあるのだろうか。

國史・野史は、上下並びに世に傳わるも、徃徃として野史を信じ、國史を疑うは何ぞや。亦た以て國史 諱むこと多く、敢て盡くは書せず、或いは諛墓・索米（生計の道をはかる）に涉り、之を野〔史〕に求むるに若かず謂うが若しとすること母れ。紀言・紀動・聞見の自ずから真誠にして、三長（『舊唐書』劉子玄傳「史才須有三長，世無其人，故史才少也。三長，謂才也，學也，識也」）を擅にし、萬世を信じさせるに足るを知らず。惟だ史のみ其の職を失う。故に稗官虞初 其の欺を售る。夫れ年〔號〕 既に革除され、事 必ず散逸す。今、建文の事を紀す者は無慮數十家。謬の相い承けて讀むに忍びざる者有るに至る。其の雌黃（謬論）を逞しくし遂

に朱紫を淆す。此れ豈に細故（取るに足りないこと）ならんや。此れ其の不可なるの四なり（天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・八葉・「論革除附録疏」）。

④国史は、憚ることが多く、全てを記さなかったり、諂つらいや生計の具としているので信頼できない。野史のほうがましであるとして、野史を信用して事実を混乱させている。

所謂ゆる革除なる者は、天下後世をして復た建文有るを知らざらしむるに過ぎず云爾。天下は惟だ史のみ誣る可からざるを知らず。吾 即ち建文の紀年もて史を立つるを為さざるも、或いは遠く千萬禩（『實錄』・『國権』は「世」に作る）の後、寧（いづくん）ぞ能く建文の實歴を以て洪武の虚年と為さんや。必ず將に大書・特書して洪武の統に接せんとす。夫れ其の紀年もて史を千萬禩の後に立つと今日の得ると為すと孰^いれぞ。此れ其の不可なるの五なり（明・天啓壬戌序・刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・八葉・「論革除附録疏」）。

⑤「革除」とは、建文という存在を知らしめないだけである。史というもののみがそしることができないものである。いま私が「建文」の紀年を記さなくても、千万世の後には「建文」の紀年を「洪武」とできるだろうか。したがって、いま「建文」の紀年を記録するのと千万世の後に記すのとどちらがよいのであろうか。

このように、五点に分けて「建文」の年号を記さない不備を指摘する。そして、夫れ勢いを以てすれば則ち革除する能わず。理を以てすれば則ち革除する可からず。情を以てすれば則ち革除するに忍びず。事を以てすれば則ち必ずしも革除せず。而して顧みるに之を議すること莫き者は、此れ臣の未だ解せざる所なり（天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・八葉・「論革除附録疏」）。

という。理からすると「革除」できない。情からすると「革除」するに忍びない。事実からすると必ずしも「革除」できない。なのに、このことを議論しな

いのは、王祖嫡が理解できないところである、と述べる。

こうして、王祖嫡は、

伏して乞う、陛下 臣（王祖嫡）の十載の孤忠を憐れみ、臣（王祖嫡）の一得の末議を察し、勅して該部に下し虚心に會議させれば、斷ずるに聖衷よりし、建文の位號を復すること成化十一年十二月の事例①の如くし、仍お史館に付し、四年の事績を將^もって、修輯して「[實] 錄」を為し、凡ての野史の不經の説を廢し盡く毀棄を為すとならん…（天啓壬戌序刻本『師竹堂集』卷二十九・奏疏・十二葉・「論革除附錄疏」）。

①成化十一年十二月戊子に、景帝（景泰帝）の帝号を復活し、「郕王」から「恭仁康定景皇帝」に改められたこと。

といい、景帝（景泰帝）の事例のように、建文帝の帝号を復活し、建文帝の四年間の事跡を記録して「實錄」を作成し、野史の妄言をなくすべきだ、と願い出るのである。

この王祖嫡の「建文の年號を復し、景皇帝（景泰帝）實錄を改正する」提案について、申時行（字は汝默、号は瑤泉・賜間堂・休休居士・蘇庵主人・蘇齋。江蘇長洲の人。嘉靖十四年（一五三五）～萬曆四十二年（一六一四）。嘉靖四十一年壬戌科（一五六二）一甲一名の進士）は、つぎのように述べる。

〔萬曆十六年三月〕壬辰（十日）、大學士の申時行 奏すらく、禮部覆司業の王祖嫡 「建文の年號を復し、景皇帝（景泰帝）實錄を改正する」を請う。竊かに惟うに建文の年號は、成祖（永樂帝）の靖難の日の詔に「今年は仍お洪武三十五年を以て紀と為す」に因る。其の建文の年號の相い傳えて以て「革除」と為す。靖難の事蹟を考えるに及び亦た「少主」と稱し「元年」・「二年」・「三年」・「四年」と稱す、則ち是れ未だ嘗て革除せざるなり。但だ建文と稱せざるのみ。「英宗實錄」は、成化初年に修めらる。景皇帝（景泰帝）の未だ位號を復さざるの先に在り、故に仍お「郕戾王」と稱し、景泰の七年〔間〕の事は遂に「英宗實錄」の内に附す。部覆（關係部局の提案）極めて詳明と為す。第だ事體は重大にして、年歲 久遠なれば、更定せ

んと欲するが如し。[しかし、それは] 須らく聖裁よりすべし。今、景皇帝の位號は已に復すれば、實錄の内の改正に過ぎず。其の理順い、事は亦た易し。惟だ建文の年號は靖難より以來、未だ位號を復し、實錄を修むるを請う者有らず。事繇（事態）は創舉（はじめて）なれば、未だ會議を経ず。臣等 擅（ほしいまま）に定擬し難し。伏して聖斷を乞いて施行せん、と。上諭ありて景皇帝の位號は復すを已め、實錄は纂修改正を候て。建文の年號は仍お之を已めよ（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之一百九十六・萬曆十六年三月壬辰（十日）条）。

建文の年號を記さないのは、成祖永樂帝の「建文の年号を洪武に変更せよ」という詔によっている。建文帝の事績を述べるのに「少主」といい、その元年・二年・三年・四年と言っていることからすると、年号を「革除」したとはできない。ただ「建文」と称しないだけである。「建文」の年号を復活し、その「実録」を編纂したいということについては、いまだに請願したものはいないし、提案されたこともない。臣下である我々では決められない。皇帝陛下のお考えを待つて施行してみたいというのである。

下駄を預けられた神宗萬曆帝は、「建文」の年号は復活させない方針を示した。

その六年後、萬曆二十二年（一五九四）八月二十九日に孫羽侯（字は鵬初，号は湘山・遂初堂。湖廣華容の人。萬曆十七年己丑科（一五八九）三甲五十一名の進士）が、正史を修めるにあたって建文帝・景泰帝（景帝）は、独立した本紀を立てるべきだと上奏した。

[萬曆二十二年八月] 癸酉（二十九日）、禮科左給事中の孫羽侯 [以下のように] 條奏（逐條上奏）す。正史を纂修するの議、本紀は則ち建文・景泰の兩朝は宜しく故實を詳稽して二紀を立つべし。孫（太祖の孫の建文帝）をして祖號を蒙らしむ・弟（景泰帝は英宗の弟）をして兄の年を襲わしむること勿れ……（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百七十六・「萬曆二十二年八月癸酉」条）。

しかし、この疏も「留中（指將臣子上的奏章留置宮禁之中，不交辦）」とされた。

翌年の萬曆二十三年（一五九五）七月四日に、楊天民（字は正甫，号は全甫。山西太平の人。萬曆十七年己丑科（一五八九）三甲九十六名の進士）と牛應元とが、建文の年号を復活するように請願した。その結果、建文の年号は復活することになった。

楊天民，字は正甫，山西太平の人なり。萬曆十七年の進士。…禮科給事中に擢せらる。時 方に國史を纂修せんとす。御史の牛應元と「一緒に」建文の年號を復せんことを請う。之に従う…（『明史』卷二百三十三・列傳第一百二十一）。

楊天民の『楊全甫諫草』には、この疏が収められ、その疏の末に日月が記されている。それによると、萬曆二十三年七月四日に疏を奉り、九月十八日に、建文帝の事績は太祖洪武帝紀の最後に記載し、「建文」の年号を用いるように、と認められたという。

萬曆二十三年七月初四日，具題（上奏）す。本月初七日，聖旨を奉じ，禮部 知道せり。九月十六日，該禮部 覆す。十八日，奉^うけたる聖旨に建文の事蹟は着して太祖高皇帝紀の末に載せ，仍お其の年號を存せしめよ，と（『楊全甫諫草』卷一・七葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

では、どのような提案であったのだろうか。楊天民の疏では、最初につぎのようにいう。

臣 惟うに神器(帝位)の相い承くるは、天下の大事なり。名號の顯揚(表彰)は直ちに天壤と共敝(一蓮托生)なり。其の跡は悪くんぞ泯ぼす可けんや。國史の纂修は一代の大典なり。記載の昭垂(明示する)は通古を以て信と為す。其の實は悪くんぞ●(一字不明：以下同じ)けんや（『楊全甫諫草』卷一・一葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。帝位の繼承は、天下の大事である。その名号は天下とともにあり、その業績は絶やすことができないものである。

そして、「革除の辯は臣の言より始まらず」といい、嘉靖十四年の楊撰と萬

曆十六年の王祖嫡の提案を紹介する。まず、楊撰の提案をつぎのように紹介する。

夫れ革除の辯は臣の言より始まらず。臣 査するに嘉靖十四年に該吏科給事中の楊撰 嘗て革除せられし難に死すの諸臣を表揚するを以て請う。其の意は盖し隠然と建文の地を為すなり。比時（当時）、禮官の夏言（字は公謹、号は桂洲・鷗園・白鷗園・賜問堂。江西貴谿の人。正徳十二年丁丑科（一五一七）三甲三名の進士）倉卒に召され對するに未だ暇あらずに困りて深息して既に謂う、諸臣は宜しく褒録するべからず、と。明日の議を上つるに及び、又た文皇帝（永樂帝）の百世遷らざるの宗を以て詞と爲し、卒に讜議（革除についての正直な議論）をして行なわざらしむ。缺典なること故の如し。今に抵るまで筆橐（文官）の臣 未だ嘗て夏言の失對に切齒せざるはなきなり（『楊全甫諫草』卷一・一葉～二葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

嘉靖十四年に楊撰は、建文帝のことを持ち出すために革除された諸臣の名譽回復を願い出た。しかし、残念なことに夏言によって否定された。

つづいて、王祖嫡の提案を紹介する。

我が皇上の萬曆十六年に迨び、該國子監司業の王祖嫡 復た建文は宜しく革除すべからずと景泰は宜しく附録すべからざるとを并せて形わし^{あら}奏辯す。而して禮部尚書の沈鯉（字は仲化、号は龍江・亦玉堂・潛齋。河南歸德衛の人。嘉靖四十四年乙丑科（一五六五）三甲三名の進士）は亦た心を悉して議覆し、擬して「聖徳の聖政の第一事 中外喁喁（期待する）として以為らく事は必ず舉ぐるに在り」と為すも、附録・[建文の] 改正を謂わざるに至る。兪旨を蒙ると雖も、革除されし年號は依然として報じて罷むとさる。此れ何をか謂わんや。夫れ建文は太祖の嫡孫なれば、固より皇上の一脉骨肉の親なり。^も若し其の泯滅^{ゆる}を聽せば、宗誼の如きは何ぞや（『楊全甫諫草』卷一・二葉～三葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

王祖嫡は、「建文」は抹殺すべきでないことと景泰帝の事跡は独立した「實録」で記述すべきだということとを願い出た。しかし、沈鯉が「そうすべきだ」という回答を準備したものの、景泰帝の「實録」と建文帝については触れなかった。そして、論旨を得たものの「建文」の年号は復活しなかった。

こうして、楊天民は自説を述べる。「建文」の年号を残せば、永楽帝に差しさわりがあるというが、これはまったくそうではない。永楽帝には中興と創始の功績がある。建文帝の称号などのある無しによって、その功績は変化しないのである。

恐くは一の建文を存すれば、即ち成祖（永楽帝）に於いて相い妨げ、聖孝に於いて未だ^{かな}悩むざるに因るや。是れ大いに然らざるなり。盖し靖難の舉は「天に順って人に應じ」（新しい受命者となる：『易』革卦に基づく）にして、其の師 名無きを嫌わず、永楽の勳・革命の鼎新 其の功 再造に殊ならず。●號を論ずるなし。成祖は自ずから中興・創始の義有り。固より建文の位號の有無を以て増損（増減）と為さず（『楊全甫諫草』卷一・四葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

そして、

成祖 登極の後、猶お建文を稱して少帝と為す。且つ其の葬るや天子の禮を用う。曷ぞ嘗て明らかに「革除」を議するを惡まんや。説く者 謂う、宣力（尽力する）の臣 此の形跡に假りて以て功伐（功績）を張らんと欲す、故に「革除」に賛成して此に至る、と。〔これは〕良に誣ならずと為す。此れを以て臣（楊天民）〔以下のように〕知る。「革除」の復するは、固より徒に建文の為ならず。榮名の正しきを崇び、善く成祖の心を體する所以なり。史は以て信を傳う。信ぜざれば則ち疑わる。疑われれば則ち訛つ。此れ必然の勢いなり。成祖の湯武の心を以て、何ぞ人をして知らしむ可からざる者有らん。而して乃ち「革除」を以て之を諱み、後世の疑わず、訛せざらんと欲す、得んや。甚だしきは必ず一を舉げて百を律し、并せて全史にして疑い、其の諛聞（（耳障りのよい話）の具わる者と爲す。將に

好事の不經の談をして任口を以て雌黃（謬論）する得しめ、反って聖祖の心事の後世に於いて「建文帝を」討つに非ざるを白せざるの得を致す者なり（『楊全甫諫草』卷一・四葉～五葉・「累朝闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖德以光正史」疏）。

永樂帝は、即位の後、建文帝を「少帝」とし、天子の礼で葬った。なのに、はっきりと「革除」を議論したのであろうか。永樂帝の臣下が、自分の功績を誇りたいがために、「革除」に賛成して、今に至った、というものがいる。これが、ほんとうであろう。したがって、「建文」を復活させるのは、建文帝のためではなく、永樂帝のためである、という。

このように述べ、最後に憲宗成化帝が、父の英宗によって削られた景泰帝の位号を復活した事例を持ち出し、「建文」の年号を復活させても問題はないと述べる。

我朝の英宗皇帝 嘗て景皇帝（景泰帝）の位號を削らざるや。憲宗皇帝（成化帝）の位を嗣ぐに及べば、則ち旋いで議を為し、復た諸を人心に質し・之を青史に垂らすも、英宗に累する有るを聞かず、亦た少しく憲宗（成化帝）の孝に虧くと聞かず。今、何ぞ獨り建文の事に於いて疑い、其の成祖に於いて相い妨げ、聖孝に於いて未だ^{かな}慚わざらんや。但だ此れのみならざるなり。往年、「革除」報じ罷めるも、猶お「正史 未だ修めず、時 姑らく待邇す」と曰うがごとし。皇上 儒臣の請を允し、業已に開局し授餐・纂編し、歳を踰ゆ。若し是の時に及び慨然として「建文の年号を」復するを命ぜば、則ち修廢舉墜（廃れたものを復興する）にして、天下萬世 皆な闕典の復興は皇上より始まると謂う。如し之を捨てれば、則ち承乖襲舛（廃れたままにしておく）にして、天下萬世 皆な闕典 終に廢るは亦た皇上より始まると謂う。聖德・聖●に關する所は、誠に渺小（微小）に非ず。…伏して請うに勅もて該部に下し、再び覆議（再審議）を加え、如果臣（楊天民）の言の謬たざれば、敢て亟やかに允行（承認）を賜えば、則ち上は以て祖德を襄（補佐）す可く、下は以て信史を^{かがや}光かす可し、而して

大孝を繼述するは武・周に在らずして、皇上に在り。臣（楊天民） 激切・祈望の至りに勝えず、「累朝の闕典 究竟に湮し難し、懇乞するに聖明時に及びて修舉し成祖の徳を以て、以て正史を光かさん」の事理に縁りて係れ未だ敢て擅便（主張）せず。謹みて題もて旨を請う（『楊全甫諫草』卷一・五葉～七葉・「累朝の闕典究竟難湮懇乞聖明及時修舉以成祖徳以光正史」疏）。

この楊天民の疏が提出されると、牛應元（字は子元・兆坤、号は春宇。陝西涇陽の人。萬曆十一年癸未科（一五八三）三甲一百七十九名の進士）も、「建文」の年号の復活を求めた。

疏下り、所司御史の牛應元 復た斷じて允行するに在りて、成祖（永樂帝）の徳を以て以て聖孝を昭らかにし以て信を天下萬世に傳うるを請う。且つ言う、建文は統を太祖（洪武帝）に受く。若し竟に革除に従えば是れ成祖の子なるを以て父の命に違うを致すなり。建文は四年を歴て自から四年の政事有り。若し堯??の革除し以て洪武に附せば、惟だ歷年の實を失うのみならず、建文の政をして得（得）失有るも、洪武より出づと謂わしむ、是れ又た成祖の子なるを以て父を誣するの事を致すなり。且つ君の位に在るは、日の天を行くが如し。天下萬世 明らかに之を知る。革除せんと欲すと雖も、得（得）可からざる者なり、と（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉」条）。

建文帝は、太祖洪武帝から統を受けている、年号を革除してしまえば、太祖洪武帝の命に逆らうことになる。また、年号を革除すれば、歴史的事実を失ってしまうだけでなく、建文帝の四年間の事跡の得失を太祖洪武帝に転嫁してしまう。これでは、子である永樂帝が、父の太祖洪武帝を誣してしまうことになる。したがって、「革除」したいと思っていても、できないという。

また、范謙（字は汝益、号は含虚、雙柏堂、諡は文恪。江西豐城の人。嘉靖甲午一月九日～萬曆二十五年十月二十九日。隆慶二年戊辰科（一五六八）三甲

一百六十九名の進士)なども、再び同様のことを願い出る。

太祖洪武帝の治世は三十一年で終わっているのに、それ以後も太祖洪武帝の「洪武」の年号を用いることができるのか。建文帝は、正式に統治していた。それを抹殺できるのか。命を革めたとしても、ふつうその年は年号を変えない。なのにその年号を最初から抹殺する。これは、理からするとおかしいことである。そもそも「革除」というのは、「建文」の年号があったことを知らしめないものであった。だが、二百年・十人の皇帝を経て、知らないものはいない。覆い隠すことはできないのである。それに、太祖洪武帝が即位させたものを抹殺するのは、太祖洪武帝の教えではないし、永樂帝の心でもない。情からするとおかしいことである。永樂帝の即位や建文帝の遜國は、筋がとっている。どうして異説を唱えて混乱させるのか。事実からするとおかしいことである。いま『元史』の編纂が行なわれ、元朝の最後の皇帝に諡があたえられている。だが、本朝の歴史的事実を滅ぼして、元の最後の皇帝の順帝に諡することができるのか。また、どうして建文帝の位号を抹殺しながら、景泰帝の位号を改められるのか。どうして建文帝を削っておきながら、建文帝の諸臣の名誉回復するのか。どうして君主を遺棄して、百世の後にも埋没させるのか。そこで、「實錄」編纂のこの時にあたって、「高廟實錄」の洪武三十二年から三十五年の間の建文帝の事跡を取り出し、「建文」の年号を復活して、「少帝本紀」を編纂してもらいたい、と改めて願い出たのである。

禮官の范謙等 覆奏するに、太祖は位に在ること實に三十一年なり。而して三十二年以後は安くんぞ復た洪武の號を蒙るを得(得)んや。建文 既に負辰臨朝(即位し政務を執る)し、海の内外に^{いた}薄るまで、奉じて正朔有り。一旦 之を除かば、豈に信を傳うる所以あるか。惟だ是れ前代の更朝易位は一見に非ざるなり。即ち失位喪師の主の其の命を革むるも、其の年を革めず。故に餘分の閏位は猶お相い承くるを得(得)、古を稽うる者は考うる所有り。建文は緒を繼ぎ、紀年 頒朔し、遠邇(遠近)の華夷奉行せざる靡きなるに、遽かに名號をして泯泯として聞くこと無からしむ。

此れ理に于いて未だ順ならざる有るに似たり。夫れ「革除」と云う者は後世に復た建文有るを知らざらしめんと欲するのみ。今は年二百を歴て・世十葉（代）を歴て、建文君有るを知らざる者なし。今日の聞見 已に塗する可からず。何ぞ況んや後世の天下萬世 自から耳目有るをや。稗官野史

各々紀載有り。建文の紀年を以て洪武に作らんと欲するも、虚（虚）號を得んや。此れ勢に于いて亦た掩い難きもの有り。太祖（洪武帝）天下を以て挈げて、之を建文に授く。建文 天下を委ねられて、旋いで成祖（永樂帝）に歸す。今、太祖の親授する所を以て革めて之を除くは、乃ち太祖の貽謀（父の子に対する教え）の意に非ざる無けんや。亦た成祖の善繼の心に非ざらんや。情に于いて亦た未だ愜ざる有り。況んや師を「靖難」と曰い、「天に順って人に應じ」（新しい受命者となる：『易』革卦に基づく）の舉有りて、更朝易肆の勞無し、成祖の嗣服（即位）するや、戡亂（反乱を平定する）を以てす。建文の出亡するや、遜國を以てす。其の名正しく、其の言順う。何れの嫌・何れの疑ありて、假りに掩飾し以て後世の紛紜の議を起さん。事に于いて亦た必ずしも^{しか}尔（爾）ならざる者なり。太祖 天下を定めて、首に儒臣に命じて元史を纂修す。且つ元主に于いては「順帝」を以て之に諡す。成祖の即位の初め、建文を稱して少帝と為し、在位の諸臣の舊惡を念わざるの旨有り。我が皇上 登極の詔の内開に「革除され罪を被る諸臣は、各々其の郷・其の墳墓を祠らしめ、苗裔の存する者有れば、厚く卹録を加えよ」と。萬曆十六年に允されし本部題覆する司業王祖嫡の疏に特に景皇帝の「實錄」を復し纂するを俟ちて改正せよ、と。夫れ『元史』

修む可し。奈何ぞ其れ寔を當代に失いて、勝國（元朝）の君に諡すべきを失わん。奈何ぞ其れ號を削りて、本朝の景泰の位號 改たむ可けん。奈何ぞ其れ名を建文に^{おし}斬み、一の建文の時の事に死するの臣 褒む可けん。奈何ぞ其の君を遺棄し、百世に淹沒せしめん。願わくは此の纂修の時に及び、史局に命じて「高廟實錄」中に于いて、洪武三十二年より三十五年に逮ぶの遺事を摘して、復た建文の年號を稱し、輯して「少帝本紀」と為し、

奏上せん、と（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉」条）。

なお、于慎行（字は可遠・無垢、号は穀城。山東東阿の人。隆慶二年戊辰科（一五六八）二甲六十一名の進士）の撰した范謙の墓誌銘には、

提調官に充せられし時、方に正史を修めんとす。公（范謙）副總裁と爲り、「建文本紀」を纂し、其の年號を復せんことを請う。上（神宗萬曆帝）其の議を是とし史館に下す（『穀城山館文集』卷二十四・四葉・「明故資政大夫妻禮部尚書兼翰林院學士贈太子少保范文恪公合葬墓誌銘」）。

とある。「国史」を編纂するにあたって副總裁となり、「建文本紀」をまとめ、「建文」の年号を復活するようお願い出て、神宗萬曆帝がその提案をよしとして、史館に命じたというのである。

これらの提案の結果、『實錄』にはつぎのように記される。

詔もて建文の事蹟を以て太祖高皇帝の末に附して、其の年號を存す（『大明神宗範天合道哲肅敦簡光文章武安仁止孝顯皇帝實錄』卷之二百八十九・「萬曆二十三年九月乙酉」条）。

また、『明史』神宗本紀によると、

〔二十三年九月〕乙酉（十六日）、詔もて建文の年號を復す（『明史』卷二十・本紀第二十・神宗一）。

とある。

（つづく）